
春色の光に照らされて

亀姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春色の光に照らされて

【Nコード】

N05990

【作者名】

亀姫

【あらすじ】

家出をした主人公は気がつくとなぜか異世界にいた！光の巫女としてよばれたはずが主人公のもつ黒髪は闇の印だと言われてしまう。そんな主人公を守ると決めた神官と騎士団隊長の二人と、かなりえらそうな王様に囲まれて、主人公はだれに恋をするのか…。そして、徐々に主人公と異世界の真実が浮かび上がってきて…。

プロローグ

私、藤乃春^{ふじのはる}は今日家出をした。

持っている中で一番大きな旅行用のバックにあまり多くない荷物を
つめ、誰にも何も告げず、

置手紙を残して家を去った。

そして時刻は20時。灯りのともっている家々の間を、きれいな
星空をぼんやりと見ながらあてもなく歩いている。でも、不思議と
これからどうしようといった不安はなかった。

頭上では月が輝いている。月…とても大きくてまん丸だ。きれい。

そういえば、小さい頃買ひ物の帰りにお母さんとよく星みたまつけな
…。なつかしいなあ。そんなことを考えてるせいかな、なんだか今日
の月は優しく暖かいと思うてしまう。あゝ、月に行けたらなあ。

月なら私を受け入れてくれる、そんな気がするんだ。宇宙に行きた
いんじゃない、ただ優しい月のもとに…。帰りたいの…。

「私は…。ここだよ。」

小さくつぶやいてみた言葉は、夜の闇にきえていった…。

プロローグ（後書き）

はじめまして、亀姫です。処女作ですよ。どうかあったかい目で
みまってください。よろしくおねがいします！

1、異世界での恐怖・・・（前書き）

タイトルどおりすこし暴力的な場面があるので気を付けてください。

1、異世界での恐怖・・・

光…光が見える…。やわらかな白い光。

「・・・っん・・・」

…あ…れ…？私、寝ちゃったの…？視界にうつるのは高い高い天井と白い壁。

ここ…どこ…？起き上がり辺りを見回す春。ふと、あるものが目に付く。奥にある、色とりどりのステンドグラスがはめこまれた窓。そこから入る外の光はステンドグラスを通って、赤・白・黄色・青などの美しい光に変わっている。春が近づいていくと光が春の体にあたりぽかぽかと暖かい。ステンドグラスには上下左右のはじ、つなげるとダイヤの形になる位置に模様が描かれている。

右にはオレンジ色の丸、左には赤と白の二つの丸、下には三日月が向かい合い円を作っているような形、反対に上には三日月が背中を向けあい「X」を作ったような形の模様がそれぞれ描かれている。

不思議な模様。でも一番気になるのは中央に描かれた、銀の長い髪の女性と白いシルエットだけの髪の長い女性とが横向きに向かい合っている絵。とつてもきれい。でもそれ以上に何か、この絵のもつ何かにひかれる…。なんで、かなあ。　　って・・・、ああ～～～

く…！たいへん、たいへん。

忘れてたっ！どうして家出をしていたはずの私がこの協会のような場所に寝ていたのか、考えてたんだっ！…うゝん。本当に私どうしてここにいいのかなあ。道端をあるいてはいたけどこんな場所に来た覚えはないし、こんなところが私の街にあったことも知らなかった。・・・ん？ここ・・・、もしかして私の街じゃなかったりする？あ…れ…？？

いくら考えてもさっぱりわからず、同じことをぐるぐると考えていると、外から足音が聞こえてきた。

だんだんこっちに近づいてくる…。恐る恐る扉に近づいていく春。

パンツッ！！

勢いよく扉が開かれて、入ってきたのは四人の外人。一人は白い神父さんのような服を着た五十代くらいのおじさん。その後ろにはさらに三人の外人がいた。みな同じ格好で、上は黒い薄手の長袖を着ていて、その上に白いノースリーブの、首元はVネックの服を着てる。下は黒い丈夫なズボンに茶色いブーツ。騎士のような格好。歳は三十代くらい。四人とも髪は茶色。で顔つきはフランス人に似てる。

・・・えっ・・・。こしもとに剣がある・・・。にせもの、だよね...？

白い服の男を見ると、こちらをじっと見ていた。しんじられないものを見た、というような顔をして...。ブツブツとなにか言ったかと思うと、後ろの男達にむかって、

『~~~~~！』

聞いたこともないような言葉で何かを命令するように言った。すると男たちはこしの剣を一齐にひきぬいた。キラリと光るそれはまさしく本物の剣。男達は春をみた。殺気こもったその視線に春はぞくぞくとした。・・・何！？・・・怖い。

白い服の男が春に近寄ったかとおもうと、春の黒い髪をつかみひっぱった・・・。

ただ、春の髪はショートカットのため根元からぎりぎりとかまれる。そのまま引つ張られ男のもとにひきよせられる。痛さにかおをゆがめる春。

『~~~~~。』

なにか耳元で言われるがなんて言っているかはさっぱり分からない。男は髪をつかむ手にさらに力をこめたかとおもうと、おもいつきり地面にたたきつけた。

「うつ...。」

倒れたまま男をみると、にやりとぶきみに笑っている...。怖い...、怖い...ッ。

横を見ると、そこは森だった。考えているひまはない。森に向かって必死に走る。

森に入ると、後ろからさっきの男が大声でなにかを命令しているような声が聞こえた。

すぐに後ろから追いかけてくる足音が聞こえてきた。

1、異世界での恐怖・・・（後書き）

やっと続き書けました。次は主要キャラだすつもりです。

2、異世界の風吹くとき・・・壺

はあっ、はあっ。走る走る。

「あっ！」

ズサツッ！！

足元の木の根につまずきころんでしまった。これで三回目だ。なれない森の中を走っているため、さつきから転んではかりいた。立ち上がり、手の土をはらい、スカートについた葉をおとす。

さっきの人たち・・・。後ろを振り向く春。が、追ってくる足音が聞こえなければ、人の気配さえしない。あきらめ、たの？・・・よかった。それにしてもあの人達、どうして私を・・・。

剣を剥けられたこと、髪をつかまれたことを思い出す春。どれもみんな怖かった。とくにあの人の冷たく鋭い眼が怖かった・・・。でも、今いちばん怖いのは、ここがどこで、私はこれからどこへ向かえばいいのか分からない不安。でも、悩んでいるひまがあるなら早くこの森をぬけて町に行き、だれかにここがどこだか聞いたほうが早いはず。そう考え、森を進んでいく春。しばらくしてたくさんの木をぬけ、草原にでた。風が向かってくるように吹いている。どうやらここからは坂道になっているらしく、見渡せば町が広がっていた。・・・この町並みは・・・。

そこから見える建物はレンガ造りの洋風な家ばかり。まるでどこか別の国のよう・・・。

景色を見ているうち、春はもうひとつ重要なことに気付いた。

うそ・・・。ここは・・・。驚愕のあまり膝からガクツと落ち、草の上にペタリと座り込んでしまった。春は顔を上げ、あるものを見ている。春の見上げる先は空。青い空に白い雲が広がっている。

そして、空の真ん中には、赤と白二つの光が世界を明るく照らしていた。

月でも太陽でもないその光…。こんなことありえない…。

・・・ああ・・・ここは、外国なんかじゃない・・・。
ここは・・・異世界・・・なんだ・・・。

自然ののどかな町。レンガ造りの古い建物が多い。

そんな町の中を歩く二人の男がいた。一人は落ち着いた赤い色の長い髪をひとつにしばり、背中に

たらしめた背の高い男。もう一人はうすい黄緑色の短い髪で、赤い髪
の男よりずっと若い青年。

この二人の男は茶色い上着、中は黒い服で、銀色のベルトをし、黒いズボンと茶色のブーツをはき、腰には剣がさしてある。この町では剣を持ち歩いている者はそう珍しくなかった。この町には聖地と呼ばれる場所があり、その聖地を守るためにいる兵士がよく町を歩いているからだ。

だが、この二人はどうみても町にいる身分の低い兵士ではなかった。二人の服装は派手ではないが、

丈夫ないい生地を着ているうえ、剣も大きく立派だったからだ。町の兵士ではこんな立派なかつこはできない。

「今日はどこに泊まるんですか、隊長??」

「あそこでいいんじゃないか?」

そう言っ指差す先は小さな民宿。

「え〜! あそこですか! ? せっかくタダでとまれるんですし、もつといいところにしましょうよ!」

「いいところがどこにある?」

黄緑の髪のおこはそう言われ町を見渡すが、のどかな町では民宿くらいしかない。

「え〜、そうですけど、せっかくのチャンスなのに。あつ、じやあ今夜は宴会しましょう!」

たくさん飲んで食って。酒もじゃんじゃん飲みましょうよ。ね!」

「酒か...。それはいいな。」

「でしょー！そう考えると今から楽しみですネ。これも光の巫女様のおかげだ。」

「光の巫女……。」

「さっ、民宿着きましたよ。入りましょう。」

「……とうとう明日なのか……。」

「どうしたんです、ほらはやく。」

「ああ。」

2、異世界の風吹くとき・・・ 壱（後書き）

予定より長くなっちゃいました。どのくらいの長さでいいのか
まだ分からなくて。

3、異世界の風吹くとき・・・ 弐（前書き）

これからは一話の文の長さ、長くしようと思います。

3、異世界の風吹くとき・・・式

ザーーッ。激しく降る大粒の雨が、凍えるほど冷たい北風にのって正面から吹き荒れ、寒さにかじかむ体にさらにムチをうつ。髪からは大量のしずくがポタポタと流れ落ち、服は濡れて肌にべったりとくっついていて。すごい嵐だ。

だが、春が草原にいた時には日差しがやわらかにからだをつつみこみ、ぽかぽかと暖かいとてもいい天気だったのだ。それが、草原を下り村に近づいていくにつれてだんだんと雲行きがあやしくなり、村に入ってから完全にとしゃぶりになった。

そして、その雨のせいか村に入ったとたん春の具合も悪くなってしまった。

寒さで肺が収縮でもしたのか息がうまくできなくなり、視界もぼやけ、足にもうまく力がはいらず、

さつきから家々の壁をつたいながらふらふらと足を引きずるように歩いている。

ハア、ハアッ。苦しい……。少しでも気を抜けば倒れてしまいそう。

村にいるのにさつきから人の姿をみていない。この嵐でみんな家にももってしまっているようだ。

まるで・・・、まるでこの世界が私を拒絶して、私だけにこんな雨を降らせているみたい・・・。

ハハ・・・ッ。私、神様に見放されているのかもしれないな。この世界でも元の世界でもあっち・・・。そういえばこの前友達と神社に行つたとき、みんなが大吉とか中吉ひいて盛り上がっていたのに私一人だけ凶をひいたっけ。大凶ならまだネタになったのに・・・。

ハア、ハアッ。あつ・・・。ズルッッ!!

力なく地面にうつぶせに倒れる春。・・・ダメだ。起き上がれない。

もう指先にすら力がはいらないよ。ほんとうについてないな。
<.....ツル.....ハッ.....ル.....>

どこからか声が聞こえてきた。幼さがのこるかわいらしい声。

.....っん.....。誰か私のそばにいる.....。

ほんの少し顔をあげると、そばにおばさんが立っていて春を心配そうに見つめていた。

『.....!?!』

どうやら「大丈夫!?!」と言っているようだ。

『.....!?!?』

ああ、だんだん声が遠くに聞こえてきた。視界も.....暗く.....。
.....。

「〜ッル!ハルツ!~!」

どのくらいたつたのだろうか、気がつくとな誰かがそばで私を呼んでいた。

さっきのおばさん.....?でもこの声.....。

「ハ〜ルツ、ハルツ!~!」

やっぱりそうだ。気を失う前に聞いた声だ。目をあけ、顔を見ようとしたけど目が重くて開けられない。

「ハルツ!良かった。やっと声が届いたのね!」

意識が戻ったことに気づいたようだ。高く凜と響く、かわいらしい声だった。

ん、あれ?私の名前.....。

「クスクス。なんで私のこと知ってるの?って、顔してる。

私ね、何でも知ってるのよ!この世界のことや、ハルのいた世界のこと。もちろんハルのこともっ!」

えっ、今この子「ハルのいた世界」って言った!?!私が異世界からきたこと知ってるの!?!

聞こうにも声が出ない…。

「あつ、そうだ、ハル。これあげるっ。」

はい、と言ってだらりとのびた私の手に何か入れる。あつ…、この子の手あつたかい…。

その暖かさのおかげか、さっきまで力の入らなかった指先が…動く。ゆっくりと指を動かしそれを握る。なんだろう？すごくちいさくて、表面がごつごつしてる。

「甘くておいしいよ。食べてみて。」

その言葉でようやくそれが食べ物だと分かった。口に入れてみる。舌の上でころころところがって…甘い。おいしい。甘さで体が満たされていく気がする。

あつ……。意識がまた遠のいていく……。

まって、まだこの子にもらったお礼を言っていない。名前を……聞いてない……。のに……。

「またね、ハル——。」

3、異世界の風吹くとき・・・ 貳（後書き）

（お知らせ）

受験勉強が大変になってきてしまい、これからは更新一か月に一回とかなると思います。すみません（・n・）？

ちなみに、主人公いじめ（？）はこの回でいったん終わります。

まあ、おどろくことはありますが。。

遅くなりましたが、ここまで見て下さり、ありがとうございました。次回もよろしくおねがいします。

4、出会い

「・・・っん。ここは・・・？」

「おや、気がついたみたいだね。」

気がつくのと、どこかの家のベッドの上にいた。となりには50代くらいのおばさんがいる。

あれ・・・この人どこかで・・・。

「ほら、水。ずっと寝てたからねえ、ノドかわいてるだろう？」

「あ、はい。ありがとうございます。」

さしだされたコップを受け取り、口にはこぶ。ゴクツ、ゴクツ。よっぽどノドが渴いていたのだらうあつという間に水を飲みほす春。

「もう一杯飲むかい？ だけどその前にあんたが起きたこと奥様に報告しないとねえ。」

「ロネ、わたしならここにいますよ。」

声のしたほうを見ると、扉のまえに栗色の髪の女性がいた。女性は春の前まで歩いてくると、につこりと微笑んだ。

「はじめまして、わたしはサイネリア・カーロン。この家の女主人つてところね。」

「あつ、はじめまして。藤乃春です。」

「ハルちゃん、と呼んでもいいかしら？」

「はっ、はい。」

うわあ、この人すごい綺麗。美人なあ！・・・どうしよう。わたしずっと寝てたし髪ばさばさかも。あわてて手で髪を直す春。

「あなた嵐の中倒れていたこと覚えてる？」

「はい。」

「あなたが倒れているのをここにいるロネが見つけてね、すごい熱もでてたしここに運んだの。」

「あつ、ありがとうございます！」

「いいのよ。ところでハルちゃん、あなた帰る場所はあるの？」

「帰る・・・場所。家はあるけれど・・・もう帰れない。家出したきちゃったから。でも、たとえ家出していなかったとしてもここが異世界だと気付いた今、帰る方法もない。」

「・・・ないです。」

「そう。」

これからどうしよう・・・行くあてもないし・・・。

家から持ってきたカバンもいつのまにかなくなってお金もないし。でも、あつたとしてもこつちの世界ではつかえないだろうなあ。

「ねえ、ハルちゃん。もしよかったら、このままこの家に住まない？」

それは思いがけない言葉だった。

「無理にとは言わないけれど、行くあてがないんだったら。」

正直、その言葉に甘えてしまいたい。けれど見ず知らずの他人にそんな迷惑かけられない。

「ありがたいですけど、私・・・」

「ハルちゃん、私実は今わくわくしてるの。なんで分かる？」

え？わくわく・・・？

「私ね、結婚はしてるけど子供はいないの・・・だから・・・だから、あなたと住めたら、娘がいるようで楽しいんじゃないかと思つてね。そう考えたらなんだかとてもわくわくしちゃって。」

「娘・・・？」

サイネリアは静かに頷いた。

「娘なんて思われて・・・迷惑かしら・・・？」

娘・・・母・・・記憶の中の母親を思い出す春。けれどぼんやりとしか思い出せない。

目の前のサイネリアを見る。微笑んでいた。母親は・・・笑つてい

たっけ？

こんなにも優しく微笑んでいたっけ？・・・分からない。

「・・・お母さん・・・。」

ぼそっとつぶやく春。

ふわっ・・・。

春はサイネリアに抱き締められていた。

あったかい・・・。それに髪かな、いい香りがする。

「せめてここにいる間はわたしのこと、母親だと思って・・・。」
優しい声、優しい人。抱きしめられるなんて久しぶり。

「私を・・・ここにおいてくれませんか・・・？」

なんでもします。家事だって、なんだって。だからお願いします。」
サイネリアの肩が一瞬ゆらぐ。

「よろこんで。」

そして、始まる。新たな生活が。

そして、奇妙にゆがむ。運命が歪んでいく。

ゆがんだ運命が、新たな運命を生み出すのか、ゆつくりと元の形にもどるのか・・・、それはまだだれにも分からない。

4、出会い（後書き）

これからすこしずつコメディイ入ってくかもです。

出会ったばかりのサイネリアがなぜこんなに春を気遣うのか・・・、
それはいずれ・・・。

お気に入り登録してくださった方、読んでくださったかた、
ありがとうございました

5、M y s t o m a c h i s g r o w l i n g (前書き)

約1カ月もお待たせしてしまいました。

あれ？待ってないって？アハハハ（。！。く）

5、My stomach is growing

「そういえばハルちゃん、お腹すいてない？」

「あつ、少しくぐぎゅつ、ぐぎゅるるるるううう……」
・！グオ~~~~！>

春の言葉をさえぎるように、部屋中に鳴り響いたお腹の音。……
誰のかは、うつむいて顔を真っ赤にさせてる春の姿を見れば、言わずとも分かるだろう。

——ひどい。いくらなんでもひどすぎるっ！なんでこの
タイミングであんなすごいのが！？

・……ううっ……。恥ずかしい……。しかも最後のくグオ~~~~
く>とか……。あり得ないよ……。

ちらりとサイネリアを見ると、口をおさえ小刻みに体をゆらしていた。
た。

「……っう。……。っふ。……。もっ……。だめ……。ふふっ。
こらえきれないわ……！」

次の瞬間、ハルのお腹の音の何倍も大きなサイネリアの笑い声が屋敷中にこだました。

——十分後

「ごめんなさい、ハルちゃん。つい……。こらえきれず。ああ、もう本当にごめんなさい。」

「——いいんです。気にしてませんから。」

——うん、気にしてない、気にしてないよ。ただ、ちょっと・
・というかものすっごくびっくりしただけ。だってサイネリアさん

の笑い声を聞きつけた侍女さんたちがすごい顔して部屋の扉を開け、部屋の中のわたしをみるとまたすごい顔して扉を閉め、それがその後何度も繰り返されたんだもん。

「なんだろう？わたしの・・・」

「私の顔なんかついてる・・・？」

「？なにもついてないけど。」

「えっ、あっ、ちがいます、いや、そうです。ってなにが！？」

「さあ、なにかしら？」

「すみません、真面目に答えてもらっちゃって。」

「とにかくご飯にしましょう。さっきの音は・・・笑っといてなんだけど、気にしないでいいわ。二日も寝ていたのだから仕方ないもの。ねっ？　ああ、ハルちゃん立てるかしら？無理そうならここに運びましょうか？」

「っあ、いえ、大丈夫です。立ってます。——って、あれ？今なんて言いました？」

「？無理そうならここに運びましょうか？？」

「いえ、その少し前。」

「？二日も寝ていたのだから仕方ないもの？？」

「はい、それです！私、二日間も寝てたんですか！？」

「ええ、屋敷の医者によると疲労と風邪のせいらしいわ。」

「二日も寝たの初めてだなあ。ああ・・・。」

「すみません、二日間も迷惑かけて・・・。」

「いいのよ、迷惑なんて思っていないから。それにハルちゃんとはこれから一緒に住むのだから、迷惑ならどんどんかけて。嬉しいから。」

「え・・・？」

「迷惑が、嬉しい？」

「ええ。だって言ったでしょう。ここにいる間は私のこと母親だと思っって。迷惑をかけちゃうのは家族なら当然でしょう？」

「当然・・・？」

迷惑なんていくら家族でもかけないほうがいいに決まってるのに。
でもサイネリアさんなんだか嬉しそうだし、まっ、いっか。

「奥様、お嬢様、朝食の準備ができましたよ。さっ、お腹すいてる
だろぅからねえ。はやくおいで。」

口ネが扉から顔をのぞかせる。

「さっ、行きましようハルちゃん。」

「はい！」

「うわぁ！すご〜い、おいしそうっ！」

長い長いテーブルの上にはこれまた豪華な料理がずらりと並んでいた。

パツと見はどれもハルのいた世界とそう変わらないが、何これ？
というような料理もいくつかあった。

「ここに座ってちょうだい、ハルちゃん。ああ、それと口ネ。今からはあなた以外ここには近づけないでちょうだい。」

「はいよ、奥様。さあ、聞いただろ！ちった、ちった！」

後半はその場にいた侍女達に言っていた。侍女達はちらちらと春の
ほうを振り返りながら部屋を出て行った。

「奥様、本当にあたしもいていいんですかい？」

口ネが尋ねる。

「もちろんよ、それにあなたうすうす気づいてたんでしょ？」

口ネはその問いに答えない代わりに小さく微笑んだ。

「さてハルちゃん、まず一つ聞いわ。」

あなた、この世界の者じゃないわね？」

5、M y s t o m a c h i s g r o w l i n g (後書き)

題名の意味はお腹が鳴るです。

ハルのお腹のなり方は過去、私が鳴った音です。

6、カーロンの人々（前書き）

もつすこしながくしたかったけれど、とりあえずこのくらいで・・・。

6、カーロンの人々

「あなた、この世界の者じゃないわね？」

確信にみちた言葉だった。まるで答えを知って尋ねているかのよう
に。

「え・・・あの、私・・・」

きまわずそうにうつむくハル。だが、ぎゅっと服の裾をつかむと顔を
あげた。

「——はい、そうです。」

声がふるえていた。

「・・・わたしは、ハルちゃんが異世界人だろうとなかろうと関係
ないわ。ハルちゃんはハルちゃんだもの。」

ね、そうでしようと言ネリアは春に微笑みかけた。

「大丈夫よ、安心して。ハルちゃんがこの世界にとけこめるように
私も手伝うし、もし帰りたいなら一緒に方法をさがすから。ねっ？」
その声はとても優しく響いた。

「ありがとうございます。ほんとうにありがとうございます。
・・・でも」

「でも？」

「あつ、いえ。あつ、それにしてもどうして私が異世界からきたっ
て——」「勘よ。」

「へ、勘？」

「ええ、勘よ。」

ニッコリ。

「勘・・・でわかるものなんですか？」

「ええ。」

ニッコリ。

勘でわかるだろうか？——否、ふつうはわからない。しかもあんなに確信をもってなんて無理だ。

しかし、サイネリアはあいかわらずニツコリとしているものの、その笑顔はこれ以上なにも言えなくさせるものがあつた。

「もうすこし質問する予定だったけど、今日はやめときましょうね。さつ、ハルちゃん、料理がこれいじょう冷める前にどんどん食べてちょうだいね。これとかおすすめよ。あと、こっちもおいしいかな。」

サイネリアがどんどん料理をすすめてくる。ふと、春の目にある料理がとまった。

「これ・・・ハンバーグそっくり！」

「それはグリットって料理さ！うまいから食べてごらん。」

そばにいた口ネが答える。春はさつそくその料理を口にはこんだ。

「んっ、おいしい！」

グリットとよばれた料理は本当にハンバーグそっくりだった。ちがうのはソースがすこし甘いことと、なかがもちもちとしているところ。異世界風ハンバーグといったところだろう。

「グリットは子供に人気だからね。お嬢さまの口にもよくあうだろう。」

子供、という言葉に春はすこしひっかかったが、口ネから見れば十分子供だろうと考え、そのまま気にしないことにした。

「なかのもちもちとしたのって何の肉ですか？」

「肉？それは肉じゃないさね。けど、中身は聞かないほうがいいと思うねえ。」

苦笑いを浮かべる口ネ。もちもち・・・うねうねと動き回る気持ちの悪いものが春の頭に浮かんだ。まさか・・・怖くてそれ以上は聞けなかった。

「ごちそうさまでした。」

それを聞いたサイネリアが不思議そうな顔をしていたが、春がいた
だきますとごちそうさまでしたの説明をすると納得したような顔を
した。

「さっ、片づけましょうか。」

「あ、手伝います。」

「大丈夫よ。すぐ終わるから。」

そう言つてサイネリアが指をならすと、テーブルの上にあつた食器
がパツと消えた。

「え!？」

「簡単な魔法よ。」

「すごいっ！魔法があるなんて!」

「フフ。それよりロネ、準備はできたかしら?」

「完璧ですよ。」

「ありがとうロネ。さっ、ハルちゃん行つてきてくれないかしら。」

「?どこに、ですか?」

「それは彼女たちについていけば分かるわ。」

扉のほうをみるといつの間に来たのか三人の侍女がいた。

そのまま侍女についていくと、着いたのは・・・風呂場だった。侍
女達がくるりと振り向く。

「申し遅れました、お嬢様。わたくしはココといいます。」

「あたしはスー。」

「あたしはアンですう。」

「えっと私は春といいます。あの、もしかしてわたしお風呂に入る
んですか?」

「はい。せんえつながら私たちがお嬢様の入浴を手伝わせていた
だきます。」

ココという侍女がにつこりと言う。

「えっ、手伝うって!？」

「お嬢様の体を隅々まで洗うということですよ。」

ここの隣にいたもう一人の侍女アンが言った。あともう一人の侍女スーはというと春をじつと見つめていた。

——— そうですねわたし、侍女さんたちにはなぜかずつと見られているんだった。何だろう? ちよつと怖い

「お嬢さま……。お嬢さまのその髪色……。」

スーが口をひらく。ビクッ。

「なんて……。なんてきれいなのお!？」

「へ？」

「こんなきれいな髪色みたことない!! さわってもいい!？」

「はぁ……。どうぞ。」

髪をさわられる春。

「つやつやだし、さらつさら! すごーい!」

「ちよつ、スーばかりズルーイ!」

アンにもさわっていいですか!？とせがまれ、困惑しながらもとりあえず、どうぞと答える。

「二人とも失礼ですよ! すみませんお嬢さま。」

ココが申し訳なさそうに謝る。

「こんな可愛らしいお嬢さまのお世話ができるなんて嬉しくて、みんなはしゃいじゃってて。」

さあ、二人とも仕事しますよ。お嬢さまをぬがせましょう。」

「えっ!？つて、きやあ!」

あつという間に脱がされ浴槽へ。アンの、すみずみまで磨くという言葉が頭に浮かぶ。

「いやっ、まって……。!」

「大丈夫、安心して身を任せてください。」

「あつ、きや~~~~~~~~~!」

またも屋敷にこだました。

6、カーロンの人々（後書き）

逆ハ－のわりになかなか男性陣が出ないという・・・。
でたらでたでハルは大変でしょうが。いろんな意味で（笑）
あと2・3話で出てくると思います。

7、始動（前書き）

活動報告でいっていた予告とは異なっていました。すみません。おそらく次の話はその予告どおりになるはずです。たぶん。（おいおい）

7、始動

「おーい、じつちゃーん！」

「なんだ、ヒュー。大声でわめいて。」

窓から叫ぶ相手をみて不機嫌そうにしている赤髪の男。彼の名はジエイ・ドナフ。

「あつ、隊長。それがじつちゃんがいなくなっただですよ。」

そう答えたのは黄緑色の髪の男。名はヒュー・ノマス。

「じつちゃん？ああ、あの鳥のことか。」

それよりも、いいかげんそのとってつけたような敬語はやめろ。」

「えー。結構、敬語苦労したのになあ。まあいいけど。それでさあ、ここ二日じつちゃん消えては現れてで今日も気がついていたらいなくなってたんだよ。なあ隊長。じつちゃんどこ行ってるんだと思う??」

知るか。そう言おうとして、ふと気が付く。

「お前、なぜ探しに行かないんだ？ お前の力を使えば簡単だろう。」

「……一呼吸おいて。」

「ああっ！そっか！！　　うわ、最初っからそうすりゃ良かったのか。」

そっかそっかと、ひとときしり呟いたかと思うと、

「じゃ、いつてきまーす。隊長！」

風のように窓から出て行ってしまった・・・。

「せめてドアから行け。」

一人残されたジェイ・ドナフは呆れたように呟いた。

ジェイはそのまま近くにあった椅子に腰かけると、ハアッツと深いため息をついた。

そのため息はヒューに対してではなく、今回の任務に対するものだった。

光の巫女をみつけ、城に連れ帰ること。

それが今回の任務だった。だが、彼らがこの町にきてから四日、予言の日から三日たったというのに

その任務ははまだ成功していない。肝心の巫女がみつからないのだ。

——まったく。娘一人に情けない。だが、何かおかしい・・・。

搜索と偵察を得意とするヒュー《あいつ》がいるというのに
いまだみつからないというのは。

そう考えていたその時、

—————ッ!!

人の気配。

瞬間、腰の剣に手をかける。

「なぜお前がここにいる。」

「頼んでおいた仕事が遅いので手伝いに来たまですよ。」

そう言つて現れた男は優雅な身のこなしで窓から部屋へフワリと降り立った。跳んだのではなく、

浮いて……。男の髪は日の光を受け銀にきらめき、全身は黒いスーツにハットとまるでマジシャンのような格好だった。

「……あまり真昼間からそれはやらないほうが良いと思うが。」

「大丈夫ですよ。あなた以外の人にはただの日の光に見えますから。」

今はちゃんと見えていますけどね。そう付け足すと男は、相手が自分の突然の出現に不機嫌そうな顔を

しているのを知りながらあえてニツコリと微笑み、ことさら悪くなつた表情を見て、また更に満足げに微笑んだ。

「今回の仕事は私が思っていたより難しくなっていました。邪魔が二人入ったせいでね。」

「正しくは四人じゃないのか？聖地に巫女以外の者の二オイが四人分あつたとヒューが言っていた。」

「ああ、三人ぶんは数えようと思えなくて。」

あんな雑魚、数えるのにも値しませんよ。要はそういうことだろう。「それにその者たちのほかにもう一人いるんですよ。ですが、その前に、聖地に踏み入ったあの男とあなたの言う三人とやらを片づけます。ジェイ、あなたも手伝ってください。」

「……いいのか、あの男を捕まえて。」

「私が許可しますよ。」

「そうか。それで、もう一人の邪魔者とは誰のことだ？」

そのとたん銀の髪の方は不敵な笑みを浮かべ答えた。

「サイネリア・カーロン。」

「彼女には巫女を返して頂きます。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0599o/>

春色の光に照らされて

2011年4月19日11時27分発行